



～1.9mm ふるい目に対応した米づくりへの挑戦～

平成29年11月29日 島根県農業技術センター技術普及部

29年産つや姫 適正な籾数の確保により、登熟が向上

登熟期間の高温に耐え、収量・品質を維持

今回は、各地域において、本年作の反省会や、30年産米種子の注文が始まるのにあわせて、県マイスター実証ほの結果や県下の作柄等について皆様へお伝えします。

1 マイスター実証ほの結果

(1) 収量

- ・収量（平年並み～やや少ない）
＝穂数（平年並み）×1穂籾数（やや少ない）×登熟歩合（平年並み）×千粒重（やや高い）
- ・1.9mm 選別歩留まりはやや高い

(2) 品質

- ・整粒歩合は平年並み～やや高い
- ・玄米蛋白質含有率は平年並み

2 県東部平坦地（JAしまねのくにびき、やすぎ、いずも、斐川地区本部）の作柄

- ・収量及び1等米比率、また、粗収益の試算では「コシヒカリ」を大きく上回る（図1、2）
- ・検査の格下げ理由は、心白腹白と整粒不足が大部分を占める

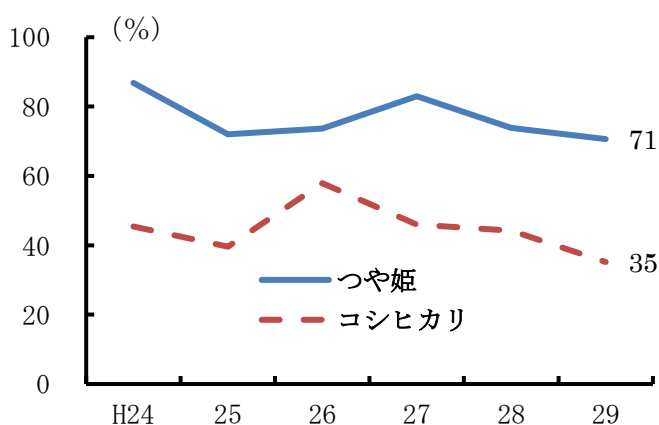


図1 1等米比率の推移

※H24～28年は同年3/末現在。H29年は11/20現在

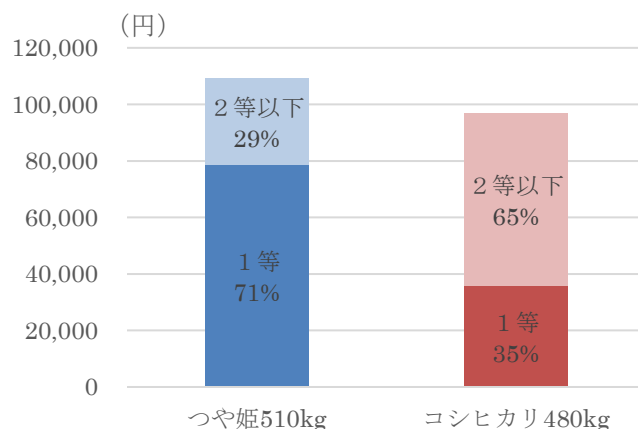


図2 粗収益/10aの試算

※JA買取単価を参考にして試算。「つや姫」の場合、収量510kgの内、1等71%、2等以下29%の試算

本年の登熟期間は、高温傾向で白未熟粒が発生しやすい気象条件となりましたが、一定の収量及び品質を維持しました。この結果は、収穫までの全般を通して、大きな気象災害や病虫害被害がなく、稲体が健全に生育したこと、また、生育に応じた水管理や肥培管理等の定着により、適正な籾数（＝穂数×1穂籾数）が確保され、登熟が向上したこと等が要因に挙げられます。

「つや姫」は、奨励品種採用以降、作付面積が1,000haに拡大する中、継続して安定的な収量及び品質を維持しています。

実需者からの引き合いが強く供給不足が続く中、引き続き、各地域において、高品質な「つや姫」栽培の推進とともに作付の推進にご協力ください。

[研究トピックスー29年産「つや姫」及び「コシヒカリ」の作期別収量・品質ー]

当センター作物科の研究結果です。

なお、「つや姫」は、いずれの作期においても「コシヒカリ」を上回る結果になりました。

- ・ 1株3本植え（手植え） 条間30cm 株間18cm
- ・ 元肥：しまねつや姫専用一発平場用 全層施肥 施肥窒素成分量5kg/10a

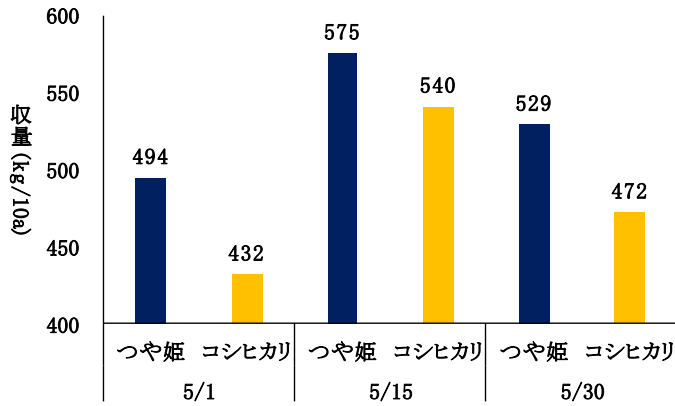


図1 収量 (1.9mm 選別)

○収量は、いずれの作期においても、「つや姫」が「コシヒカリ」を大きく上回りました。
 ○5/1 移植は、他の作期に比較して単位面積あたりの籾数が少なく、低い収量水準となりました。
 ○これまでの3年間の試験においては、5月中旬移植の収量がやや多い傾向が認められます。

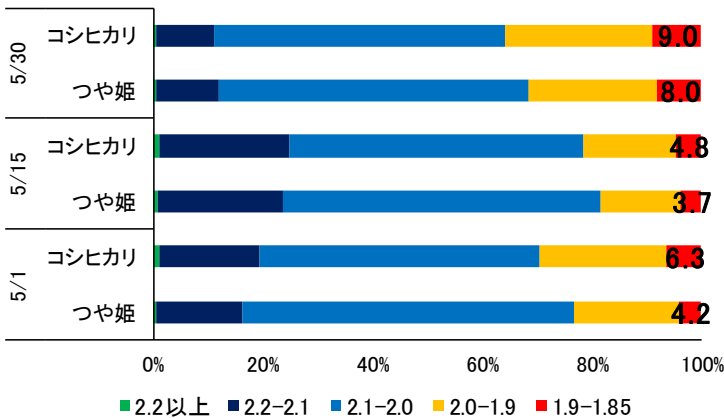


図2 玄米粒厚分布

○玄米粒厚分布について見ると、いずれの作期においても、1.9mm 選別歩留まりは、「つや姫」が「コシヒカリ」を上回りました。
 ○5/30 移植は、他の作期に比較して1.9mm 未満の割合が高い (1.9mm 選別歩留まりが低い) 傾向が認められ、これは過去の試験と同様の結果となりました。

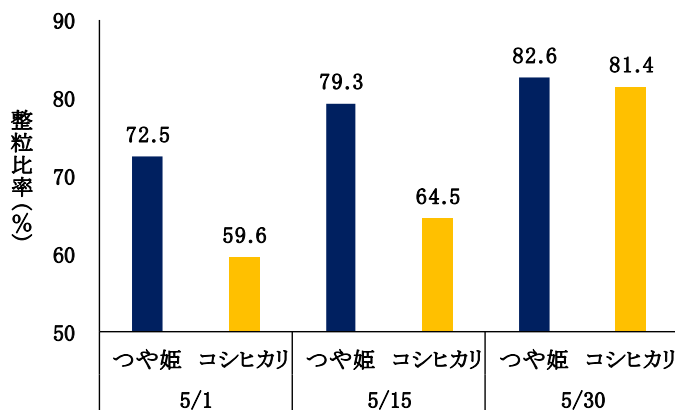


図3 外観品質 (1.9mm 選別)

○整粒比率は、いずれの作期においても、「つや姫」が「コシヒカリ」を上回りました。
 ○5/30 移植の整粒比率は、他の作期に比較して高い傾向が認められ、これは過去の試験と同様の結果となりました。